

## 分詞構文

英語の分詞構文は様々な意味があつて厄介ですね。基本的に従属接続詞などを使った副文の意味を、分詞を使った副詞句の形で表すものと言えます。

その中で特徴的で注意を要するのは主動詞の後に置いて結果や追加を表す用法です。この用法は他の言語では見当たらず、英語独特のものようです。結果の意味を明示するために **thereby** や **thus** を分詞の前に置くことがあります。and の代用としての追加つまり単純接続の用法も少なくありません。

The storm hit the granary, **causing** great damage.

Richmond was the target of numerous attempts to seize possession of the capital, **finally falling** to the Federals in April 1865.

“分詞”は本来は形容詞の働きをする動詞の派生形、準動詞を指しますが、英語のように同じ形で副詞の働きもするものも同じ名称で呼んでいます。スラブ語などでは別々の形をとり、前者を形動詞、後者を副動詞と言いつけています。英語では能動形現在の能動分詞と受動形完了を表す過去分詞の二種類だけですが、言語によっては未来分詞（英語のto be doneに相当）があり、またそれぞれに能動形と受動形を備えている言葉もあります。英語のように分詞が二種類しかない場合は、現在分詞＝能動現在と過去分詞＝受動完了を表す場合が一般的なようです。ここでは、特に様々な意味を表し、副文に書き直すとき様々な従属接続詞で書き換えられる、分詞を使った多義的な構文を中心に扱います。

準動詞を使った副詞句の形で副文の意味を表すものは様々なヨーロッパ言語に見られます。

フランス語では en＋現在分詞 ...ant の形が使われます。(en は様々な品詞がありますが、ここでは in の意味の前置詞と考えられています。en の付いた形はジェロンディフと呼ばれます。) 同時 (しながら)、時 (すると、するにつれて)、原因・手段 (したので、することによって)、条件 (すれば)、前に強調の副詞 tout を付けて同時や譲歩・対立 (するとしても、なのに) など様々な意味を表します。書面語では en のない形、つまり分詞構文も使われますが、手段の意味は表せないなどジェロンディフと用法にやや違いがあるようです。

イタリア語では、過去分詞 (...ato/女性ata など) は形容詞用法の他に副詞用法もあつて分詞構文を構成し、時・様態・理由・条件、それに pur を前置して譲歩の意味を表します (他動詞の場合は過去分詞の性・数は直接目的語の性・数と一致します)。現在分詞 (...ante/複数anti など) は形容詞用法のみで、副詞用法には代わりにジェルンディオ (...ando など) を使い、やはり時・様態・理由・条件・譲歩、それに手段を表します。主節の主語と異なる場合はジェルンディオの後にその主語を置きます。

Essendo venuto Maria, tutti sono felici. (マリアが来たので、皆んな喜んでいる)

スペイン語では、現在分詞 (...ando など) は副詞用法しかなく、分詞構文としては様態、手段、理由、時、条件、譲歩を表します。過去分詞 (...ado など) は主に形容詞として使われますが、分詞構文としては時 (してから) や理由、条件、譲歩を表します。

次の分詞構文はどんな意味でしょう。

Fr: Prenant souvent l'avion, il connaît parfaitement l'aéroport. (Often taking the plane, he knows the airport perfectly.)

Sp: Acquistato al mercato nero, sarebbe costato meno. (Purchased on the black market, it would have costed less.)

It: Caminando por la calle, me encontré con mi jefe. (Walking down the street, I met my boss.)

ドイツ語やオランダ語にも現在分詞や過去分詞を使った分詞構文はある(分詞は句末に置かれる)そうですが、それよりも従属接続詞を使った副文の方が好まれるようです。ただし熟語としてや修飾語を伴わない副詞の形では普通に使用されています。

**Aus dieser Perspektive gesehen, ergibt das keinen Sinn.** (この点からみると、なんの意味も生じない)

スラブ諸語などでは動詞の副詞形を副動詞と呼んでいます。スラブ語の動詞は完了体と不完了体という2つの形を持ち、一般に一方の形に接頭辞または接尾辞を付加しまたはその母音を変えることで他方の形が得られます。不完了体の現在形は現在の進行・継続や反復・習慣を表しますが、完了体は一回の行為の完了やその結果を表しその現在形は未来を表します。この二つの体のそれぞれに副動詞があり、不完了体(ロシア語では -ya、副動詞現在という)は「しながら、するとき、する途中」、完了体(-v/-š、副動詞過去)は「してから、してみると」の意味を表します。現在のロシア語では主文と主語の異なる絶対構文は許されませんが、昔は可能だったようです。分詞構文に相当する副動詞構文は教会スラブ語の時代から存在したそうです。副動詞構文の基本的な意味はその行為が主動詞と同時かそれより前かなのですが、文脈に応じて実際には理由・条件・逆説など様々な意味を表すことがあります。粗っぽく言うなら、副動詞現在は現在分詞、副動詞過去は現在分詞完了形に相当するとみなすことができます。スラブ語の副動詞には受動形はありません。

**Обедая, он смотрел телевизор.** (食事をしながら彼はTVを見ていた)

**Пообедав, он посмотрел телевизор.** (食事を終えてから彼はTVを見た)

バルト語のリトアニア語は、13種の分詞を有し、そのうち半分詞、副分詞4種と一部の現在分詞が分詞構文に用いられているようで、時間・原因・条件・譲歩など様々な意味を示すようです。

**Eīdamas namō, sūnūs daināvo.** (家へ帰りながら、息子は歌っていた)

**Mótinai parėjus namō, sūnūs apsidžiaugė.** (母親が家に帰ってくると、息子は喜んだ)

したがって、以上の諸言語では副詞用法の形が未完了/現在分詞と完了/過去分詞の二つしかなく、必然的に文脈上さまざまな(主文と従文の)関係を内包することになります。もちろん、欧州諸語などには、**when** や **because** などの従属接続詞を使った副詞節があり、主文と従文の関係を明確に表すことができます。分詞構文の意味は、副詞節で表すところをより軽い副詞句で表すことにあり、それで文のバランスが変わるわけです。

このような表現はどのようにして生まれたのでしょうか。

ラテン語に絶対(独立)奪格という表現があります。名詞の奪格(“から”の意味)がそれを修飾する語(分詞や形容詞、名詞など)の奪格を伴って、互いに主語と述語の関係をなし、主文(主節)の状況を示す副文(副詞節)のように用いられます。副詞節の働きをするが接続詞なしに用いられるので、理由、時、条件、譲歩などのうちどれを意味するかは文脈に依存します。絶対/独立と呼ばれるのは、この句の意味上の主語が主文の主語と一致しないためです。中世以降も盛んに用いられ、分詞構文発展の基になったと言われています。この表現用法の便利さを知っている文人達が自国語の手持ちの材料を使って分詞、副動詞の用法を展開していったのでしょうか。ラテン語は十七八世紀まで、法律や科学の分野で普通に用いられていました。

格は異なりますが、ギリシア語の絶対属格、サンスクリットの絶対位格(処格)(ときに、ので、のに)や使用頻度は低いですが絶対属格(～の間、～なので、～にもかかわらず)なども同様の働きをし、絶対構文と総称されます。英語でも古英語の時代から絶対与格が存在して時に韻文や翻訳に使われていたそうです。この構文の発展によってラテン語の影響は大きかったけれども、本来自国語にそれぞれ元になる形があったのでしょうか。格変化がなく

なると分詞構文そのものです。英語では中英語末期に格変化の喪失と共に絶対主格構文、つまり分詞構文になりました。奪格などの名残りを反映したものがフランス語の *en* や付帯状況構文の *with* かもしれません。

*Cicerōne consule, Catilīna conspīrāvit.* (Cicero [being] consul, Catilina conspired)

*Patre vīvō, puella beāta erat.* (her father [being] live, the girl was happy)

*Mātre repugnante, filia sīc fēcit.* (her mother opposing, she did so)

ἔαρος ἀρχομένου, οἱ Ἀθηναῖοι ἐπλευσαν εἰς νησον. (spring beginning, the Athenians sailed to the island)

τοῦ δεσπότου κελεύσαντος, οἱ δοῦλοι ἤρξαζον. (the master having ordered, the slaves began to work.)

Sansk: *rudantassa dārakassa pabbaji.* (the child weeping, he became a monk)

*gāvīsu duyhamānāsu gato.* (the cow being milked, he went out)

こうした分詞の副詞的用法は従属節と競合するもので、地域や時代によってまた文語と口語によって、どちらかが選好されることがあり、分詞の形容詞用法と関係節の関係に似ています。

分詞構文に相当する表現がない言語では、従属接続詞をもつ主文・従文型の構文を使っています。アラビア語、スワヒリ語、インドネシア語、タガログ語、ビルマ語、クメール語、ベトナム語、タイ語、中国語などが基本的にそうです。したがって、多義性はなくなります。中国語では如果～就 (if)、因為～所以、(because)、雖然～但 (though) など、スワヒリ語では、*kama* (if)、*kwa sababu* (because)、*ingawa* (though) などがあります (時 *when* だけは接続詞ではなく関係節を用いて表されます)。膠着語であるハンガリー語やフィン語にも西欧流の従属接続詞が発達しており、ハンガリー語では、*mikor* (いつ) に定冠詞を付けた *amikor* (when)、*mi* (what) の具格からできた *mivel* (because)、*mi* に後置詞 *előtt* をつけてできた *mielőtt* (before) などがあります。

一方、日本語のような膠着型の言語などでは、(動詞が定動詞形を取るという意味での) 従属節がなく、動詞を副詞化するための接尾辞を使ったいわば連用形型の従属句が何種類もあり、それぞれ異なる意味を担っているのが普通です。

モンゴル語では、*-j/-c* し/して、*-n* して、*-aad* してから、*-bal/-vol* ならば、*-bc* ても/としても、*-xad* するとき/したとき、*-tal* するまで/するうちに/すると、*-saar* して以来/しながら、*-magc/-xlaar* するとすぐ、*-xaar* するよりは/するために/しようと、*-snaar* した結果。

韓国語では、*-go* し、*-a/-oe* し、*-asa* して、*-ado* しても、*-ge* ように、*-gi ttaemune* ので、*-gi joene* する前に、*-(eu)myoen* すれば、*-(eu)myoensoe* ながら、*-(eu)n hue* した後で、*-(eu)nikka* するから、*-(eu)lyoego* しようと、*-jiman* だが、*-neunde* が、*-lyoego* しようと(思う)。

フィン語では *kun* (when)、*koska* (because)、*jotta* (in order that)、*jos* (if)、*vaikka* (although)、*että* (that) などの従属接続詞を使うほかに、様々な従属句があります：*ma* 不定詞に各語尾を付けて、*-massa* している途中で、しながら、*-masta* してから、*-maan* しに/するために、*-malla* することによって、*-matta* せずに、*a* 不定詞の変格 *-kseni* するために、*e* 不定詞の具格 *-en* することによって/しながら、同内格 *-essa* している間に、受動過去分詞の分格 *-tua* した後で。(なお、フィン語では英語の動名詞構文のようなものを分詞構文と呼んでいます)

トルコ語では、接続詞がペルシア語由来の *çünkü* (because) だけありますが、基本は連用形 (副動詞) 型で、次のような形があります：*-(y)ip* して、*-(y)erek* しながら、*-(y)ince* すると、*-meden* せずに、*-meden önce* する前に、*-dikten sonra* した後に。

ヒンディー語も基本は連用形型ですが、jab (when)、kionki (because)、hālānki (although) などの接続詞があり、いわば混合型といえます。未完了分詞と完了分詞の副詞用法があり、また他の語を伴って様々な意味を表すことができます。

未完了分詞 karte (hue) しながら/することに、karte karte し続けて/しているうちに/しそうになって、karte hī するとすぐに、karte hue bhī しながらも。完了分詞kiyā (hue) して/したままで/してから、kiyā kiyā ずっと～したままで、binā kiyā せずに、bagair kiyā せずに。また、動詞語幹+kar (karnāの場合は karke) の形の接続分詞があり、「して、してから、すると」の意味を表します。ベンガル語やネパール語も似た状況のようです。

bībī hāste hue bolī (妻は笑いながら話した)

unhē aisā kām karte śarm āegii (彼らはこんなことをして恥ずかしく思うだろう)

laṛkī sir nīcā kie baiṭhī thī (少女は頭を垂れたまま坐っていた)

voh binā kuch bole bāhar nikal gayā (彼は何も話さずに出て行った)

āpse milkar mujhe baṛī khushī huī. (あなたにお会いしてとても嬉しいです)

タミル語などのドラビダ諸語も連用形型に属します。タミル語では接続分詞、不定詞、動名詞、連体分詞などの準動詞に適切な語尾を付加して従属節に相当する句を作っているようです。

古典漢語(漢文)の“而”は訓読では、「して」「しこうして」などの順接や「しかるに」「しかれども」などの逆接で読み下しますが、この言葉自体は前の動詞/文と後の動詞/文に何らかの関係があることを示唆しているにすぎません。働きの点で分詞構文と同じです。訓読みが同じテやドモでも、意味はいろいろありそうです。四十二而シテ不惑。 學而テ不思則罔、思而テ不學則殆。 千里馬常有而ドモ伯樂不常有。 子欲養而ドモ親不待。

一般に、英語のandなどの接続詞を使っても、文脈上で前文と後文の内容から従属接続詞を使った場合と同様の効果を表せることはしばしばあります。

The surface of the volcano is covered with pyroclast and when it rains, the water is absorbed underground like a sponge.

日本語の「連用形+て」も文脈によっていくつかの意味を表します。分詞構文と同じですね。私達は意味を意識して使っているのでしょうか。

「田畑を耕して生計を立てる。」手段 by doing

「手をつないで歩いた。」「首からカメラをぶら下げて散歩に行った。」「あわてて」付帯 with

「彼女の家へ行って話してくるよ。」継起 and (then)

「寝坊して電車で乗り遅れた。」原因 because

「梅雨があけて夏になった。」「雨降って地固まる」結果 so

「一見矛盾するようであって、決してそうではない。」「見て見ぬふりをする。」逆説 though

「明子が歌を歌って雅子がピアノを弾いた。」並列 and (入替可)

「南の国は暑くて、北の国は涼しい。」対比 while (入替可)